1_WALL

Grand Prize REPORT
Photography

第11回写真「1_WALL」展
2014年10月27日（月）～11月20日（木）
公開最終審査
2014年11月5日（水）　18:00～21:30
FINALISTS　※五十音順
浦部裕紀　北田瑞絵　高橋由衣　田中崇嗣　新居上実　吉田志穂

第11回写真「1_WALL」グランプリ

吉田 志穂 | Shiho Yoshida

**「異論はない」「ダントツだ」と圧倒的なセンスを認められて
全審査員から票を獲得した末に、グランプリを手にしたのは……**

吉田志穂　Shiho Yoshida
1992年生まれ

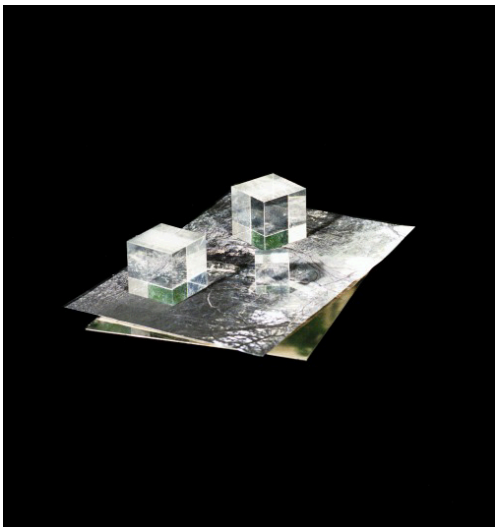
第11回 写真「1_WALL」公開最終審査 REPORT
2014年11月5日（水） 18:00～21:30
会場／ヒューリック銀座7丁目ビルB1　セミナールーム
会期／2014年10月27日（月）～11月20日（木）

JUDGES／菊地敦己（アートディレクター）　鷹野隆大（写真家）
高橋朗（フォト・ギャラリー・インターナショナルギャラリーディレクター）
土田ヒロミ（写真家）　町口覚（アートディレクター、パブリッシャー）
＜五十音順、敬省略＞
進行：菅沼比呂志（ガーディアン・ガーデン　プランニングディレクター）

11回目となる「1_WALL」写真部門。今回も、数多くの応募者からポートフォリオによる一次審査、審査員と1対1のポートフォリオレビューを行う二次審査を通過したファイナリスト6人が集まった。展示会場には、ファイナリストそれぞれの作品が各自に与えられた壁一面に展示されている。それらを審査員が一つひとつ入念にチェックし、展示会場にははりつめた空気が漂いはじめる…。第11回写真「1_WALL」のグランプリを決める公開最終審査会がいよいよ始まったのだ。ファイナリスト6名がそれぞれに与えられた2分間を最大限に使い、自作品の説明と個展プランを自らの言葉でプレゼンテーション。審議の末、グランプリに選ばれた者は、同じ会場で一年後に個展を開催する権利を約束される。立ち見が出るほど大勢の一般見学者がその行方を食い入るように見守る中、審査会の末にグランプリが決まる。

受賞作
『Log』

そこに形を与えようと思った。



1 吉田志穂 Shiho Yoshida

『Log』

ネット上には膨大な量の視覚情報があるが、他人がネット上に載せている画像も自分の撮影した画像もただの情報の断片のよう。それらを物質化したいと思い、今作品を制作。画像検索で見つけた画像を加工して再度撮影し、その写真をモニター画面で見るかのように展示した。

〈質疑応答〉

●土田：写真同士を少し重ねたり、床に斜めに置いた額などはどういう意図で配置したの？

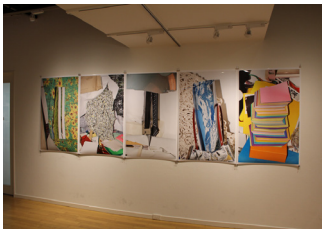
○吉田：壁の作品はマルチディスプレイをイメージして配置。床の額は斜めから見てもらったりすることで鑑賞者に何か意味がある、と思わせるため。

●高橋：この作品は具体的にどのような作業をしているの？

○吉田：画面を撮影してそれを印刷し、そこにライトを当ててさらに撮影した。人物の表情も見えないほどにぼやかしたり反射させたりさせ、あえて画面のように見せている。

2 新居上実 Takamitsu Nii

『平面上の空間』



写真という平面上の空間は、遠近法によって認識することができる。しかし、それは見る人の気まぐれによって見え方が制限されているとも言える。写真になる前の被写体と被写体同士がつくり上げる写真上の空間を観察し、写真とはどのようなものなのかを考えたい。

〈質疑応答〉

●菊地：大きな用紙にプリントした写真を5枚くっつけて展示していて……これに意図はあるの？

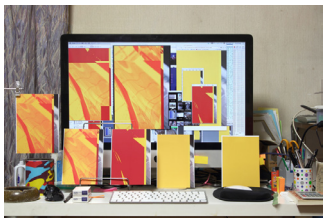
○新居：大きな写真を見てもらいたかったので、このサイズに。透き間なく展示したのは、写真のサイズを優先したためで、結果的にカールしてしまった。

●土田：遠近法を否定して、排除しようとしているの？

○新居：否定するわけではなく、実際に写真になる前に机に置いたものを見た時と、それを撮影して写真という平面で見た時の差を伝えたいと思っている。

3 浦部裕紀 Hiroki Urabe

『weak』



日常のどこにでも存在し、あらゆるものにつきまとう“弱さ”を否定するのではなく、目を向けて不安定な様相から変異を感じ取る。それらは変移をやめず、お互いに影響を及ぼしあう。写真を複数展示することにより、それぞれの関わり合いを作品で表現した。

〈質疑応答〉

●高橋：ポートフォリオがよかったが、展示する際に写真を選んだ基準はなにかある？

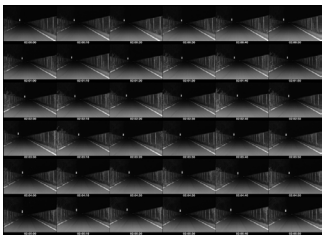
○浦部：展示ではあえてポートフォリオの中からイメージの強い写真を除いた。

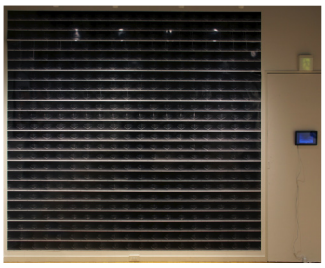
●鷹野：写真はサイズがばらばらで、ほとんどが小さい。この大きさはベストだと思う？

○浦部：いいえ。枚数を多くしたいあまりにサイズが小さくなってしまい、結果的に写真が見えづらくなってしまった。

4 田中崇嗣 Soushi Tanaka

『ILLUMINATE THE PERIOD Ⅱ』





写真家たちは写真を撮り、なにかと理由をつけて作品にする。ある作家は世間の出来事を、またある作家は内面的な事柄を。しかし本来、写真に個性や時代性は必要ない。同じ場所でただ何時間も写真を撮り続け、人の感情の入っていない無機質な作品に仕上げた。

〈質疑応答〉

●菅沼：この作品の被写体である両脇に何もない道は、どういう基準で選んだの？

○田中：場所に意味を持たせるのではなく、写真を撮るという行為自体に意味があると思っているので、観た人が特定できないような特に特徴のない場所を選んだ。

●土田：同じ場所で何時間くらい写真を撮り続けたの？ どんな精神状態になった？

○田中：5時間ほど。最後の方はどうでもよくなった。自分の意思が消えていき、写真を撮るという作業に徹した。その結果、無機質な作品になったはず。

5 北田瑞絵 Mizue Kitada

『性アンドインスティンクトイン彼女』

綺麗な女は得をして、そうでない女は傷つく。容姿でなにもかも左右される社会が怖く、自分の全てがコンプレックス。女であることで苦しんだが、救ってくれたのもまた女の存在。“女”という存在を、下着を脱いで裸になった彼女たちの写真を通して追求したい。

〈質疑応答〉

●土田：被写体となった女性があなたに向かって身体を開いてくれた、一番大きな理由は何だと思う？

○北田：今の女の子は、SNSの普及から自身の承認欲求がどんどん強くなっている。被写体となった彼女たちも、どこかで自分をもっと知ってもらいたい、見てもらいたいと思っている部分があり、その感情と、彼女たち自身を撮りたいという私の感情がちょうどあったのだと思う。

●菊地：床に台以外に猫の写真が2枚飾られているが、なぜ猫の写真にしたの？

○北田：同じ猫なのだがそれぞれ全く違う表情をしていて、観る人の心に引っかかるだろうと思ったし、写真によって表情を変えるという部分が、彼女達と重なったから。

6 高橋由衣 Yui Takahashi

『CLOSET』

幼い頃よく遊んだ母のクローゼットを再び開けることになったのは、母の遺品整理の時。4年後、母の死と向き合うためにクローゼットの前で母の服を着て、直後に亡くなった祖母の服も着た。切っても切れない血のつながりを感じて、作品として表現した。

〈質疑応答〉

●町口：この作品を通して、何を伝えたかったの？

○高橋：親子3代の洋服をなるべく客観的に見てもらえるように写して並べ、これも自分が培ってきた親子関係のひとつだということを伝えたかった。

●高橋：今後も、家族をテーマに作品をつくり続けていくの？

○高橋：はい。第2弾として、今度は母が写っている写真と同じ場所で同じ服装で撮影しようと考えています。内容はまだ秘密ですが、第3弾まで考えています。

■審査員の感想

ファイナリストそれぞれのプレゼンテーションとそれに対する審査員からの質疑応答も終了し、いよいよ審議がはじまる。まずは、菅沼の進行で今回の「1_WALL」展の全体的な感想を審査員一人ひとりに求める。土田さん：「吉田さん、新居さんは先鋭的な作品、高橋さんや北田さんは人間の関係性を問う、言ってみれば伝統的な作品。6人それぞれ面白い」。高橋さん：「ポートフォリオのレベルは全員がある程度のところまで来ている。しかし、自分への投影がされていないものが多くてまだ甘い」。町口さん：「ポートフォリオのレベルが高く、逆にそれが面白くない感じもした」。菊地さん：「ほとんどの作品が安心して見れるほどレベルが高いが、逆にマナーや形式を受け入れすぎてしまっている感じも」。鷹野さん：「面白い展示だった。今回は、内面的なイメージの作品がないというのが特徴だ」。続いて、ファイナリスト一人ひとりについての感想を各審査員が語る。

○吉田さんの作品について。鷹野さん：「非常にセンスがいい。若世代にとってモニター世界が現実空間となっていることがよく伝わってくる。新しい感性を感じる」。町口さん：「展示もポートフォリオも空間のとり方がとても上手く、ダントツという感じ。個展も見てみたい」。菊地さん：「よくできている分、展示の細かい部分が気になる。もっと緊張感のある作品になるはず」。土田さん：「よく見えないぼやけた写真ばかりだが、その少し手前で留まり、見ている人に何が写っているか解読させるということも必要なのではないか」。高橋さん：「ぼやかしてわかりにくい写真にすることで、鑑賞者に揺さぶりをかけることに成功している」。

○新居さんの作品について。鷹野さん：「写真を見るという行為は、平面の中に3次元空間を読み取る行為でもあるのだが、そういう視覚の制度を問う作品で、面白い」。菊地さん：「もっと大きいサイズの用紙にしてもいいくらい、これは大きいサイズで見るべき作品」。高橋さん：「ポートフォリオがよかった。個展に不安も感じるが、ぜひ見てみたい」。土田さん：「彼はイメージを物質化したくないと思っているのだろうが、むしろ発泡スチロールなどを使って立体的にして物質感を出してもいいのでは。吉田さんと似たところがある」。町口さん：「ポートフォリオの段階では自分の中で1位だったが、期待しすぎたのかもしれない。写真はとても好き」。

○浦部さんの作品について。町口さん：「ポートフォリオがよかったので、プレゼンテーションも自信を持って欲しい」。鷹野さん：「ポートフォリオは一枚ずつじっくり見てもらえるが、展示は全体が見えてしまうので一瞬で終わる。もう少し考えて展示するべき」。菊地さん：「浦部さんに限らず、自分に与えられた壁しか考えていないように見える。ギャラリーの空間全体を意識したほうがいい」。土田さん：「指摘されたところは跳ね返してやろう、というくらいの気持ちでいてほしい。力があるのに、展示が残念だ」。高橋さん：「写真が小さく、見づらい作品だった」。

○田中さんの作品について。鷹野さん：「機械的な撮り方をしたいと言っていたが、否応なく、くっついてきてしまう主観や身体性が写真から見えてくるのが面白い。徹底的に排除しようとしても見えてきてしまう部分に意識を転換していけば良いのでは」。菊地さん：「この撮影方法だとどうしてもブレてしまうはず。矛盾が生じている」。高橋さん：「展示作品はよかったが、プレゼンテーションの言葉がまだそこまで追いついていないという印象」。土田さん：「やろうとしていることは面白いが、モノクロ写真で少し単純すぎる印象」。町口さん：「新しさを感じられない。カラー写真にしてもいいのかも」。

○北田さんの作品について。鷹野さん：「迫るような力を感じる。力技のような印象もあるが、そう感じさせるのは簡単なようで簡単ではない」。高橋さん：「被写体が写してもらいたいと思う写真ばかりで、被写体を裏切ることができていないし、自分の作品になりきっていない」。土田さん：「彼女たちとの関係性が見えない。お風呂ではなく部屋の中のソファや、もっと日常的な場所で撮ってもいいのでは」。町口さん：「ポートフォリオと展示作品は、似ているようでまったく別物だった」。菊地さん：「被写体の数が多いにも関わらず、均等な写真に見えてしまう。もう少し被写体の個性が見えてきても良いのではないか」。

○高橋さんの作品について。土田さん：「この題材自体がまず面白い。第2弾、第3弾にも興味があり、見てみたい」。鷹野さん：「親子3代で祖母から高橋さんに行くまで50年はあるはずなのに洋服の趣味が一貫しているのがすごい、面白い作品だ」。菊地さん：「標本のような作品だ。洋服が中心的なモチーフであるならば、構図を再考したほうがよいのではないか」。町口さん：「第2弾、第3弾とどのように変化していくのかを見てみたい」。高橋さん：「自然光ではなくライトを使うなど、もっと光にこだわってもいいのではないか」。

■審査員による投票

ファイナリスト一人ひとりへの感想を聞いた後で、いよいよ最終審査へ。各審査員に6人の中から2人を選んでもらい、順番に発表してもらうことに。菅沼さんが審査員の表情を確かめると、迷いはないといった雰囲気で審査員たちはそれぞれ静かに頷く。
投票の結果は……

菊地／吉田・新居
鷹野／吉田・新居
高橋／吉田・新居
土田／吉田・高橋
町口／吉田・新居

吉田　5票／新居　4票／高橋　1票。

各審査員から「センスがいい」「ダントツの作品だ」と好評だった吉田さんの作品が全員から票を獲得。続いて、「ポートフォリオがいい」と評価を受けた新居さんの作品が4票。土田さんが、「可能性にかけたい」と高橋さんに1票を投じる。その結果……吉田さんが文句なしの1位となり、グランプリが決定！会場内からは割れんばかりの拍手が沸き起こる中、マイクの前へと立つ。「まさか、グランプリを取れるとは思っていませんでした。個展では、みなさんを驚かせるような展示をしたいと思います」驚きと喜びを隠しきれないといった表情で記念トロフィーを受け取った吉田さんは、そう宣言した。興奮が冷めやらぬ中、約3時間半に及んだ第11回 写真「1_WALL」公開最終審査会が幕を閉じた。

■出品者インタビュー

吉田志穂さん
グランプリを獲ることができて、本当に嬉しいし、展示も納得のいくものができた。1人で完成させたのではなく、みんなの力を借りていただいたグランプリ。先生や友人たちに感謝したい。1年後の個展では、みんなに共感してもらえるような作品を展示したいと思います。

新居上実さん
前回、前々回「1_WALL」に応募した時は奨励賞をもらった。今回こうしてファイナリストに残れたのは光栄。残念だったが悔しさをバネに、また頑張っていきたい。今後もこういった機会があれば積極的に作品をつくり続けて、何度でもチャレンジしたい。

浦部裕紀さん
自分の作品はまだまだといった感じで納得していないが、ファイナリストまで残ることができて嬉しかったし、とても楽しめた。今後も、できる限り作品をつくり続けて発表していきたい。

田中崇嗣さん
今回で「1_WALL」に応募したのは3回目。前回は奨励賞をもらっているが、今回ファイナリストになれたことで、成長できたなと感じている。今後も作品へのスタンスを貫いて、作品をつくり続けていきたい。

北田瑞絵さん
「1_WALL」に応募するのは2回目だが、前回は2次審査にも引っかかることができなかったので今回は大きな一歩。今後もこういった機会を逃さずに頑張りたい。写真を始めたきっかけは大好きな歌手の椎名林檎さん。彼女の写真を撮ることが私の目標です！

高橋由衣さん
「1_WALL」のように、審査員の意見を直に聞くことができる機会はなかなかなく、審査員の方の言葉は、どれも心に響いた。今後の作品づくりの上で参考にしたい。今回の作品は序章のようなもの。第2弾、第3弾の作品で「1_WALL」に再度チャレンジしたい。

〈文中一部敬称略　取材・文／金子摩耶〉

■お問い合わせ先
株式会社リクルートホールディングス　ガーディアン・ガーデン
〒104-0061　東京都中央区銀座7-3-5　ヒューリック銀座7丁目ビルB1F
TEL:03-5568-8818　FAX:03-5568-0512　http//rcc.recruit.co.jp
Twitter:@guardiangarden　Facebook:facebook.com/guardiangarden.tokyo

Guardian Garden
RECRUIT